

全体会 ①

東日本大震災から 3 年 ～被災地の森づくりの今とこれから～

東日本大震災から 3 年。被災地では、さまざまな課題をかかえながら「復興」が続けられています。東北 3 県（岩手・宮城・福島）の森にかかわる 3 団体のみなさんに、この 3 年の取り組みとこれから、そして都市に生活する私たちに伝えたいことを語っていただきます。

芳賀 正彦 さん ● NPO 法人吉里吉里国 理事長（岩手県）

「NPO 法人 吉里吉里国」は、岩手県大槌町吉里吉里地区を愛する有志達が、津波災害復興に向けて新たな雇用の創出と、経済復興に関わる地域主体の活動を、地元住民と一体となり地域再生に取り組んでいる団体。環境保全・森林資源や森林空間の有効活用等の事業を行う。

山だけは、
津波の前とまったく同じ状態で残った

三陸沿岸の岩手県大槌町吉里吉里という集落からやって参りました。三陸海岸のほぼ真ん中にある漁師の集落です。津波の日から今日まで、順を追って簡単にお話したいと思います。

私は、家族三人で、大震災の大津波から無事に助かりました。でも、家やすべての物を津波が奪い去ってしまいました。大震災前、吉里吉里の集落には約 250 隻の漁船がありました。けれど、津波の後、残ったのはたったの 3 隻でした。吉里吉里の中心部はことごとく津波によって壊滅的打撃をうけ、吉里吉里の町がなくなったというような状態でした。吉里吉里の海の湾内にある養殖施設は跡形もなくなっていました。

漁師にとっては、海がなくなったと言っても過言ではなかったと思います。吉里吉里の海がなくなって、町もなくなって、働く場もなくなりました。でも、私は、最後の津波が引いたあと、すぐに気づきました。吉里吉里の海ばかりを見て暮らしてきましたが、周りを見てみると、吉里吉里の山だけは、津波の前とまったく同じ状態で残ってくれているということでした。なにか目に見えない力で、私と私の家族は助けられたような気がしましたので、助けられた命は



芳賀 正彦さん

山のなかで活かしていこうと心に決めました。そして、樵（きこり）になってしまいました。

津波のその日から、生き延びるための期間が 3 週間続きました。

避難所生活を始めた人たちで色々なグループをつくり、まず、がれきと化した吉里吉里で、津波の翌日から、行方不明者の搜索を始めました。避難所だった吉里吉里小学校から国道までの道路を確保しながら、行方不明者の搜索を続けました。

自衛隊のヘリコプターが着陸する場所がなく、重症患者がたくさんいたので、サッカー場のがれきを除けてヘリポートの建設を始め、4日後に完成しま

全体会

全体会 ① 東日本大震災から3年～被災地の森づくりの今とこれから～

した。60mの白線を引いて、中にHという文字を入れたら、すぐに自衛隊のヘリが着陸しました。次の日には、八戸沖に停泊している米軍空母から来たヘリコプターが、医薬品や支援物資をピストン輸送してくれました。

避難所となった小学校では、まだ雪が残る寒い時期だったので、子どもからお年寄りまで、寒さにふるえていました。

灯油を使うヒーターがありましたが、吉里吉里にあった小さなガソリンスタンドが全壊して、オーナーが行方不明でしたが、ガソリンスタンドの地下タンクの蓋をこじ開け、真っ先に灯油を汲み上げました。次は、軽油、ガソリンも汲み上げました。吉里吉里の国道45号線のガソリンスタンドの前には、山田や釜石から、パトカーや救急車、避難所を運営する車両が行列をつくりました。三陸沿岸で、石油燃料を地元住民の手で提供したのは、しかも震災3日後に、吉里吉里地区が最初だったのではないかと思います。

助けられた命を山のなかで活かそう

行方不明者の搜索を続けるなかで、大勢の遺体を目にするうちに、私は、この人たちに笑われないような恥ずかしくない生き方をしたいこうと決めました。私は、津波の前までは、都会の生活に憧れながら、都会と自分を比べたりして、風に吹かれて生きてきたような気がします。でも、犠牲になった人たちの姿をみて、そういう生き方はやめようと思いました。

避難所だった吉里吉里小学校の校庭片隅には、津波の日から、たき火を燃やし続けて、1か月以上、つまり生き延びるための期間、24時間たき火の炎が絶えることはありませんでした。避難所の体育館に、日中働いてくたくたになって帰ってきて、さあゆっくり眠ろうとしても、犠牲者の姿が浮かんできて、眠ることができませんでした。真夜中に何度も起きて、校庭の片隅のたき火の炎をみつめることしか術がありませんでした。たき火の炎が教えてくれたような

気がしました。津波でもがき苦しみながら亡くなっていった人たちの思い。「それをお前が自分の背中に背負って生きていけ」と、たき火の炎が諭してくれた気がします。

私は、助けられた命を山のなかで活かそう、苦しみ悲しみながら亡くなっていった人の思いを背中にしっかり背負って、ずっと死ぬまで、山の現場に立ち続けようと、たき火がそう教えてくれました。

5月15日に、避難所生活の人たちに声をかけて、体を動かそう、汗をかこうと、じっとしているのがいちばんつらいんです。木材住宅のがれきを薪にして販売して、こづかいを稼ごうと呼びかけました。12名が同意して、グループをつくりました。まだ任意団体でしたが、「吉里吉里国復活の薪」という団体をつくって、廃材を人力で引き抜きながら、釘や電線コードなどをきれいに取り除いて、決められた寸法にチェーンソーで伐って、斧を振り上げて、薪を作り始めました。

最初は、津波の泥にまみれた薪が売れるはずがないとの声がスタッフの中で相次ぎましたが、はじめてから1週間後、私たちのプロジェクトがある新聞に掲載され、そこから多くのメディア、マスコミに出るようになり、思いがけないことに、薪の生産が追いつかないほどの大量注文が、北海道から屋久島まで、舞い込むようになりました。なかには、オランダから買いにきてくださった方もいました。

復興工事は真っ先にがれき撤去から始まりました。まず木造住宅からです。9月いっぱいまで木造住宅のがれきは、吉里吉里集落からなくなりました。薪の原料がなくなったので、9月30日で復活の薪プロジェクトはいったん終了しました。

5月15日に避難所の体育館でみんなに呼びかけたとき、私はこう言いました。「ゆくゆくは、がれきもなくなるのだから、みんなで山に入って樵になろう」と。

そして、6月から今日まで、毎月一回、吉里吉里国林業大学校を開催しています。6月に開催した第一回のことを私は忘れられません。チェーンソー

の取り扱いの講習会でした。チェーンソーを触ったことのない人間たちが樵になろうと決めたのでした。いろいろなプログラムを決めてやっていますが、地域の子もたちの代まで続けていこうと思っています。

震災の年が明けたころ、津波被災地のがれき処理が問題となり、マスコミなどで騒がれていました。他の市町村では受け入れてもらえない、吉里吉里集落にも山のようながれきが残っていました。被災者ができるがれき処理はなんだろうと考えました。

吉里吉里の海岸沿いに点在している林がことごとく津波の海水をかぶって、すべて立ち枯れ状態でした。これも津波のがれきだから、我々ができるがれき撤去は、津波塩害林の伐採処理作業だと。1月から12月までかけて、40～50年生のスギを伐倒して撤去しました。約一年間で、約15haの津波塩害林を処理しました。立ち枯れただけの木だったので、強度など品質は問題ありませんでしたので、この原木丸太は建築材として出荷し、私たちの給料になりました。

林業とは、恩送りの仕事

2013年から、待ちに待った吉里吉里の里山人工林の保全整備に取りかかりました。これは、孫の代まで続けていきたいと思っています。私たちの作業のほとんどは、今の段階では保育間伐です。雑草木の下刈も含まれます。40年生の人工林が多く、間伐材の1～2割ぐらいしか用材として出荷できません。残りの材は復活の薪第二章として、薪を生産しています。これは避難所のたき火の炎への恩返しです。これも子どもや孫の代まで続けていきたいと思っています。私たちが出荷した薪を購入した全国の人たちが、私がいただいた炎の恩を受け取って、薪ストーブの炎から素晴らしい力を与えてもらえたらいいと思っています。薪の生産は、これからもずっと続けていきます。

森林整備をしながら、適度な太陽光線が林内に

差し込むようになった森林空間を利用して色々な催しをしています。

一つは林業大学校です。これは、私たち吉里吉里国メンバーの林業技術の習得のためだけではありません。山主さんに林業技術を身につけてほしい、中高生や一般の会社員も、いつでも無料で参加できる林業学校です。

ほかに、森林教室を年2回やっています。私たちが力を入れているのは、次世代を担う吉里吉里の子どもたちの育成です。森林教室といっても複雑なプログラムはなく、保育園の子どもから高校生まで、手ノコで直径10～15cmの立木に受け口と追い口を入れて伐倒しています。これが私たちができる森林教室です。次世代を担う子どもたちに、物心ついたときから、山のなかで汗をかかせたいと思っています。おっかない体験をしてもらいたい。現場に立つことのできる人材を育成する森林教室です。

私たNPO吉里吉里国は、プロの林業事業体を目指しています。もうほとんど私たちは林業のプロとして通用する腕になったと自負しています。私たちが思う林業とは、40～50年前に植林してくれた先人たちの汗をいただいているんだと思います。植林して育った木を、私たちは間伐材としていただいて、お金に換えて糧を得ています。今度は、最終間伐が終わったあと、いろいろな樹種の苗木を植林しようと思っています。

私たちが植林でかいた汗の見返りは、私たちが生きているうちには返ってきません。40～50年先に吉里吉里に暮らす人たちが、私たちの汗を受け取ってくれればいいと思っています。すなわち、私が思う林業とは、「恩送りの仕事」だと思っています。先人の恩をいただいて、その恩をそのままそっくり50年先の人たちに送る。私は、自分の流した汗の見返りが生きているうちに返ってこなくていいと思っています。かえって、50年先の吉里吉里の人たちが見返りを受け取ってほしいと思っています。

そういうふうには、山の中で生かされていることに、ふるえるような喜びを感じています。これが私の信

全体会

全体会 ① 東日本大震災から3年～被災地の森づくりの今とこれから～

じている林業です。恩送りの仕事です。

ある本の一節に、「はじめて美しい村などあったわけではない。そこで美しく暮らそうとする人がいてはじめて美しい村がつくられたのである」とあります。『遠野物語』を書いた柳田国男の本の一節です。

私たち被災地で生きていこうと決めた人間たちは、津波の前の吉里吉里の町に戻すのでは面白くないと思っています。もっと美しい街をつくりあげようと思っています。それには、その本の一節のように、貧乏ではない質素な暮らしを続けながら、少しの不便さを楽しみながら、心豊かに住む人たちがいっぱいいるような吉里吉里を、大槌を、普通の人たちの手で作りあげようと思っています。子どもの代までかかるかもしれないけれど。「はじめて美しい村などあったわけではない、そこで美しく暮らそうとする人がいて、美しい村がつくられたのである」という言葉を、私は信じています。

私は66歳になります。身体の続く限り、山の現場で仁王立ちし続けながら、山のなかで生きていきたいと思っています。

大震災の直後から今日まで、全国、海外から、いろいろな人が吉里吉里国にボランティア活動に来てくれています。今でも吉里吉里国に年間800人くらい来てくれています。

私たちは、初めてボランティアに来てくれた人にいつも言っています。一泊二日でも、日帰りでも、一週間滞在する人でも、吉里吉里人になりなさいと言っています。吉里吉里人になろうとしなさい、あり続けようとしなさい、そして一緒に汗を流しましょう、ともに学びあいましょうと。助けてもらう、助けてあげるという付き合い方ではなくて、みんな一つの吉里吉里人なんだと。それを続けてきた結果、私たちはボランティアの人たちからたくさんのことを教えてもらいました。

ボランティアと私たちをつなげた仲人は、吉里吉里の海であったり、山であったと思っています。リピーターが友達を連れてきてくれます。だから、都市の森と吉里吉里の集落の裏山の森はつながっている

と思います。都市の森と地方の森の区分はないと思っています。森林はみんな、どこまでもつながっているのだと思います。

畠山 信 さん ● NPO 法人森は海の恋人 副理事長（宮城県）

「NPO 法人 森は海の恋人」は、三陸リアスの海辺の環境悪化を防ぐために、平成元年から気仙沼流域への植樹活動と海の環境教育を開始。平成21年に法人化し、環境教育・森づくり・自然環境保全の3分野で活動している。震災後は、これまでに築いた多様なネットワークを活用して、に「森は海の恋人」の理念を反映させた「震災後の自然環境を活かしたまちづくり」を推進している。

「環境教育」「環境保全」「森づくり」

私は、本業はカキやホタテの養殖業をしています。同時に、親父と一緒に NPO 森は海の恋人に携わっています。

震災から早いものでもう三年ですね。先ほどの発表にもありましたように、震災当時は大変だったと思います。下を向いてばかりだと何も進まない、動けるところからやっといこうと動き出して早三年、それは今も現在進行形で、怒涛の日々を送っています。私の住んでいる集落、気仙沼市唐桑町の西舞根というところなんですが、一昨日雪で木が折れて道路をふさいでしまい、一時孤立していて、ここに来れるか危ぶまれたんです。その地域でいろいろな取り組みをしています。今日は、その一部を説明いたします。

気仙沼は宮城県のいちばん北、岩手県との境にあります。NPO 法人化は2009年ですが、活動は1989年から始めています。漁師が山に木を植えるという行為から、山だけ、海だけ、川だけという切り離した考え方ではなくて、流域という大きな単位でものをみようということを伝えることが主な目的になっています。実際にやっていることは、「環境教育」「環境保全」「森づくり」、この三つを事業としています。それぞれがリンクしますが、総合的な目的は、森・里・海の繋がりを感覚で持つ人材育成、要は人次第ということなんですよ。海を大事に、山を大切にということにはわかるんですけども、ここに住む人の心持ち次第で良し悪しが決まってしまう、結果として、生態系への影響は人次第ということもあります。ゆえに、環境教育に力を入れています。

2011年3月11日、大変な状況でした。私は祖母



畠山 信さん

が亡くなり家を流されました。

三年経ったんですけど、最初に考えたのが、この海でもう一回生産者としてやっていけるのかということでした。海がひどい色をしていました。ボランティアで来てくださっていた大学の研究者の方々に、海を調査したいと相談したんです。私はもともと環境アセスメントの業界にいまして、専門は昆虫だったんです。いまは漁業で、変な漁業者なんですけど。研究者、我々 NPO、企業が絡むと色々な事業が展開できるという一例をご紹介します。

子どもの教育、街づくり、海や陸の調査等、この三者がひとつでも欠けていたら、まったく実施できなかったと思います。実際、色々な研究者に絡んでもらったのですが、研究者のなかには自分の領域をおかされたくないというような方もいらして、なかなか面倒くさいと思うところもありました（笑）。もちろん、研究者の専門的な知見は大変ありがたいんです。環境だけでない様々な分野の研究者に絡んでもらって、総合的に調査するということを始めました。

自然の回復力のすごさ

海の状況ですが、これは2011年5月です。なんといいますか、ひどいんです。どこの海に潜っても、海底に1mくらい、水と油をかくはんしたような層があるんです。これはもう養殖は無理だろうという感じでした。ところが、時間を追うごとに、海は回復していくんですね。自然はすごいと思いました。

1年経つと、カキの養殖も始まめられましたし、水質に問題なかった。むしろ良くなっていました。閉鎖的な水域なので、養殖をやっているところには泥がたまりやすいんですね。それが全部流されてきれいになったんです。

じいさまから、「津波の後は急げ」とよく言われていたんです。何を急ぐか、養殖の再建を急げということだったんです。何のことかわかっていなかったのですが、実際やってみると、カキ、ホタテの生長がいいんです。プランクトンが大発生していて、海の条件が整っているということが調査結果で出ています。去年の5月、カキ、ホタテの出荷が始まって、アワビ、ナマコ、ホヤが生き残っていました。当初は、死の海のようなようでしたが、急激な復活をとげていました。

一方、山は、というと、案外、陸の方が回復が遅いんですね。海の中の方が生死のサイクルが短いのではないかとのことでした。1年経たないうちに、海から油が消えました。消えた理由は、海底の泥にしみこんでいき、上には新たな堆積物ができるので、固定されたようです。全部が固定されたわけではなく、流されたり、また、油はもともと化石燃料なので、分解するバクテリアがいるようで、見た目には、油はほとんどなくなっています。

うちの集落では、1mほど地盤が沈んだんです。地盤沈下で、干潟とか湿地が生まれたんですね。潮が入るようになりました。もともと防風林があった場所や耕作放棄地が、潮の干満で1日2回海水が入るようになって、干潟化してるんです。こうした場所をいま調査しているんですがアサリが大繁殖しています。それならそのままでいいのでは、という話

もあるんですが、農地なんです。農地復旧事業という災害復旧事業で、土を入れ替えて農地に戻す、だれも使わない畑をまたつくるという、これが仕組みなんですね。一部ですが、だれも使っていなかった農地を買うしかなかったんです。買って、農地転換して、教育とか観光に使えばいいのではないかと、だれも使わない畑に戻す必要はないと、父にその土地を買ってもらって活用しています。

現在では、森・里・海の連続性が保たれた状態です。なぜかという、たいていはコンクリート建造物で連続性が仕切られるものなのですが、それに亀裂が入ったり割れたりして、そのすき間にウナギ等が繁殖しています。うちの集落の川では、ウナギがみつかっています。自然と自然の分かれ目、エコトーンというそうですが、森と田んぼの境目にコンクリートの用水路が入っているかどうかで、生態系がだいぶ変化します。それがなくなって、連続性が確保されているという状態になっています。

地盤沈下によって新しい自然環境がつくられて、そこにアサリが繁殖している。有用な生き物としてはアサリですが、人間が食べたり使ったりすることのない生き物のなかに絶滅危惧種もみつかると。そういった自然環境が地球上から減っていると思います。我々NPOは、そこを次世代の教育のためのフィールドとして活用しています。

また、この活動自体は海外でも展開していて、フィリピンのネグロス島で今年1月から始まりました。「Plant trees in peoples heart」木を植えるという行為は人の心持ちを変えていくというのは間違いないと思います。人なんです。人の心に木を植える活動をしようという事業を始めています。現場は低所得者層の多いところなのですが、森・里・海のつながりの話を現地の人にすると、意外と、日本人よりも納得してくれるんです。本当にお金がない状態で、明日食べるものにも事欠くような状況なのですが、自然資本がないと生きていけないという環境や宗教も関係しているのかもしれませんが、すっとしみこんでいくんです。

未来に何を残すべきか。問題多い巨大防潮堤

さて、防潮堤の問題です。防潮堤は難しいですね。ちなみに、私の住んでいる集落では、防潮堤は無しと決定しました。計画ができる前に、住民の合意をとって、計画をつくらないう要望書を出しました。計画されているものは一番高いもので、14.7 m でしたか。電信柱2本分くらいです。底辺が100 m ほどの台形のコンクリート構造物が海辺にできるわけです。大きいんです。

これは残念ながら三陸沿岸だけでなく、日本全国で計画されています。難しいところは、私のように漁業をやっている人間からすると、防潮堤があると生活の妨げになるんです。そもそもコンクリート建造物で人命を守ることはできないと今回わかったはずなのですが、何かがあると安心感があるという思いになってしまうんですね。100%命を守るという担保がされるのならいいのですが、それはない。逆にあぶないということもあります。

また、経済的な面もあります。地方は人口の流出が止まりません。さらに増税です。そして、管理費です。コンクリート建造物は管理費がかかるんです。未来の子どもたちに借金ばかり残すことになってしまう。作るときは国の予算だからいいのですが、管理費は自治体持ちです。今ですら直さなければならぬものがたくさんあるのに、これから先どうするのだろう、という状況です。

気仙沼の大谷海岸では、砂浜をつぶすかたちで防潮堤が計画されています。住民はどう思っているかというと、どこの地区でもそうなんですが、半分くらいは無関心、残りの半分の半分は嫌悪感、もう半分は疑問を抱いているという感じです。難しいです。ただ、難しいとばかり言っても始まらないので、住民の合意形成がいちばん重要になります。宮城県の場合は、一律の基準で造るという計画です。気仙沼の小泉地区では、建設費230億円。ちなみに防潮堤の背後地には人は住めない決まりになっています。

住民説明会をやるんですが、発言する住民は少な

くて固定されるんですね。私は失うものがないので、だれがえらい人とかがわからず、いろいろな現実伝えてしまうので敵を増やしちゃうんですけど（笑）。

野々下海岸というきれいな砂浜があったところでは、すでに防潮堤が造られています。高さが10 m くらいです。この背後地には、車一台が通れる車道と堤防より高い場所に民家があります。何を守るんだろう、と疑問に思っている人が多い。早く造ってほしいという住民の要望で造られたんですが、できあがってみると、みんな「ちょっとデカかったよね…」と。残念ながらそんな声があるんですね。

防潮堤が何を守るかということなんですけど、命を守ればいいですけど、守れるかどうかわからない。行政の説明では、道路を守るための防潮堤だと、または、防風林や防砂林を守るための防潮堤だとも言います。行政も住民も研究者も外部の人も疑問に思っている、けれど、なぜか事業が進んでしまう。

林野庁が管理するところ県や市が管理するところなど、海岸にはいっぱい管理者がいます。気仙沼市だけで7つぐらいあります。おかげさまで、法律に詳しくなりました。議事録を読んだり、法律の専門家と勉強すると、いろいろな法律がある。法律があっても、なぜか進んでしまう、よくわからない現象が三陸では起きています。

未来に何を残すべきか。これが、3年経ってからキーワードになってきました。

借金なのか、ほかのものなのか、何を残すのかと考えています。10代20代の若者は、36歳の僕の背中を見てるんです。僕は先代の背中を見て活動しています。やはり次世代が自発的に何かしようと思ったときの余地を必ず残すべきだと思っています。もちろん、コンクリート構造物が必要な部分はあります。ただ、費用対効果、便益費用を考えずに進んでしまうのが残念なんです。

いま全国で防潮堤事業計画が進んでいます。ぜひ関心をもっていただき、現場にいらしてください。

弦間 一郎 さん ● 公益財団法人ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団 事務局長（福島県）

「公益財団法人ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団」は、福島県安達郡大玉村にある「ふくしま県民の森」をはじめ福島県内の森林を拠点に、「フォレスト・エコ・ライフ」スタイルの推進、実践を図っている団体。公共施設の管理運営及び自然環境に関する事業を行い、自然との共生思想の普及に寄与する活動を行う。財団は、「フォレスト・エコ・ライフ」を、自然生態系の恒存性に学び、それを損なうことなく永く利用していく、「自然との共生」を希求する生活であるとしている。

放射性物質は、目には見えない

私たちが住んでいる福島県は、原子力発電所の事故によって、さまざまな課題を抱えています。

本来、写真を使ってお話すると分かりやすいのですが、私たちが福島に住んでいても、原発事故の影響は目に見えないんです。写真を撮っても何も変化はないんです。でも、福島はものすごく大きな変化を経験しています。今日は、みなさんに写真をお見せせずに、想像力を働かせていただいて、こんな状態かなとそれぞれの気持ちのなかで感じていただけたらと思い、あえて準備せずに来ました。

私は、東京・新宿区飯田橋の出身です。今から30年ほど前に、転勤で福島に来ました。そこで、福島其自然、人、文化に魅せられて、Iターンしました。そして、地震と原発事故に遭ったわけです。福島が大好きなので、福島をなんとか元の状態、さらにもっとおもしろいところになりたいと思っています。

現在、大玉村の安達太良山中腹にある県民の森の指定管理者をしています。今日は、県民の森を管理している中で感じている福島森が抱える問題について、お話したいと思います。

福島県はとても広いんです。地図を思い浮かべていただくと、右に太平洋、そこに原発があります。左には阿武隈山地があり、真ん中には東北新幹線や高速道路が走っている地域があります。その左に奥羽山脈があり、そこに安達太良山がありますが、そこを越えると会津地方があります。福島は、海の方から浜通り、日本海の方に会津地方、真ん中が中通りという三つの地域があります。

この三つの地域が、大震災によって受けている影響が違います。まずは大きな地震による建物が壊



弦間 一郎さん

れるなどの物理的な被害、海沿いでの津波の被害、もう一つが原子力発電所の事故です。

3月11日以降に原発が破裂しました。実際に私たちが住んでいる地域上空から放射性物質が降り注いできました。今思うと、地震の後、寒い雪の日がありましたが、その雪とともに放射性物質が地表に落ちてきたのだと。放射性物質は、私たちの身体にどのような影響を与えるのだろうか、それがどのくらいの数値であるのか、わからないままに、突然降ってきたので、私たちはパニックになりました。どうになってしまうのか・・・少しでも原発の影響があれば生活はだめになってしまうのではないかと、飲み水・食べ物はどうするのだろうと、心配になりました。大きな打撃です。

「フクシマ」というカタカナの4文字が、あっという間に世界中に広がってしまいました。しかもマイナスの意味のブランドです。フクシマという言葉が付いただけで、すべてのものがマイナス評価となっ

てしまう。中身がどうということではなくて、福島から来た、獲れたということがマイナスになってしまうという、いわゆる風評被害が起きたわけです。これは福島県内のすべてのことに関わってくるのですが、今回、その中でも、原発事故、震災が福島の森にどのような影響を与えたのかお話ししたいと思います。

まずは、目に見えない放射性物質を調べる方法があります。空間線量を測って、私たちの生活にどのような影響を与えるのか数値を出せるような仕組みになっています。3年たって、私たちも数値をだいたい冷静に受け止めて、落ち着いた暮らしができるようにできるようになりました。

ただ、あまりにもショッキングな原発事故の報道がされたので、人によっては、特に小さなお子さんを持つお母さんにとっては、ものすごいショックでした。あと、もう一つ、これは前代未聞だったので仕方なかったのですが、原発事故当初は色々な情報が乱れ飛んで、しかも後からぼろぼろと情報が出てきて、信頼できなくなりました。いまだに、小さいお子さんを外に出したくないという方が非常に多いです。

福島には、自衛隊、警察、ボランティア、行政の方がたくさん応援に来てくださいました。そうして支援をいただいている一方で、福島県から県外に避難している方が10万人を超えているはずです。とくに若い世代が心配で出ているのが多いです。そういう方々も全国で色々お世話になって暮らしています。そういう複雑な状況です。

県民の森を楽しんでいただくために

私たちが管理している県民の森にはオートキャンプ場があり、全国的にもかなり大規模で、夏休みのキャンプシーズンには一日800人泊まります。年間5万人くらいが森のキャンプを楽しみに来ています。

震災の年の夏、前年に比べて、キャンプ場利用者が4分の1になりました。75%の人が森に来なくなってしまったということです。あわせて、それまでは

森林環境教育の場として、県内外から学校の利用が多かったです。ところが、震災の年は学校利用がほぼゼロでした。こういうふうに、それまで森を有効に、楽しく利用していた人たちが原発事故を契機に、森が嫌いになってしまった、怖いものになってしまったというものすごい変化を経験しました。

今回の集いでみなさんがお話していたことは、森は素晴らしいところ、楽しいところ、私たちの暮らしに恵みを提供してくれる場所という前提に立って、森を守り育て活用するためにはどのようにしたらいいのかという議論だと思うのです。

しかし、福島ではそういった前提がひっくり返ってしまいました。昨日まで素晴らしかったものが、突如、正反対の怖くて行ってもいけない場所になってしまったというのがいちばんショックなことです。それが数字にも表れたんです。ただ、福島県内の人たちは、自分たちにとって放射性物質がどうなのかということを判断し始めたので戻りつつあります。たとえば、オートキャンプ場の利用、2012年夏には震災前と比べて50%に、2013年夏には83%に復活しました。少しずつ変化はあります。

これは県民の森での変化ですが、福島県内のほかの森林とは違いがあります。福島県すなわち行政が、県民の森を除染したんです。除染は、その地域の放射線濃度を低くするために放射性物質を移動させるという作業です。全部で90haほどある施設のなかで利用する頻度の高いところ、道、テント場、広場などの表土を手作業でかき集めて、袋に入れ、施設内に作った仮置き場に山積みしています。結果、除染した後は半分以下の空間線量になっています。

福島では、 $0.23 \mu\text{Sv/h}$ 以下になれば子どもの野外活動が大丈夫という数値があって、それを下回っているのが、県民の森には人が戻りつつあります。

福島県は全体の72%ほどが森林なのですが、その中で、原発のあった浜通り地区の一部、原発事故のあった日に放射性物質を含んだ風が北に向かい、あるところで南に向かったんですが、その通ったと

全体会

全体会 ① 東日本大震災から3年～被災地の森づくりの今とこれから～

ころが線量が高い。県内すべての森林の放射線量が高いというわけではなく、ほとんど平常値に近いとされる会津地方の南の地域でも、いまだに森に行ってはいけないと、保護者からの要望もあって学校として森に行けないという実状があります。

整理しますと、原発のあった浜通り地区では、いまだに多くの市町村で人が住めない状態です。そこに住んでいた方々は県内外の仮設住宅に入っています。非常に狭いところですよ。福島県では、海沿いは比較的暖かくて雪もあまり降らないのですが、避難しているのは中通りや会津など雪の降る寒い地域です。浜通り、中通りの一部では、まだ人が森に入れない状態です。

現状を知らないと対処できないということで、県が国や研究機関といっしょに、森の中の放射性物質の調査をしています。ただ結果が出るまで時間がかかるんです。まだわかっていないことがたくさんあって、どのように対処したらいいのか未知数の状態です。山を越えた会津地方では、原発事故の時の雲はそちらに行っていないので、線量は低い。

いわゆる教育旅行として福島に来る件数は、震災前の20%までも戻っていません。風評被害の影響を受けています。線量が低くても、森に人が来ない、森で働かないという状況があります。

将来のための「人づくり」から

ゼロの状態なら、もうこれ以上下がりようがなく、あとは上に転ずるという話をよく耳にしますけれど、福島の場合は、まだゼロにも戻れていない。これからどのぐらい線量が下がるのかもまだ見えないという不安があり、福島の森をどうしたらいいのか、県民も専門家も悩んでいて、また結論が出ていない気がします。

ただ、何もしないというわけにはいかないので、私たちの公益財団法人では人づくりを考えています。いま方向が出ていなくても20～30年後になんらかの解決方法ができたとします。そのときにそれを

実践できる人が県内にいなければどうにもならない。まだ十数万人が県外に避難していることを考えると、福島県の20年後は若い人がいないということになりかねません。

福島には素晴らしい景観や文化がありますが、森に育まれた文化、生活習慣がいま急速に失われています。こうした習慣や文化は、その場所ではじめて発揮されるものなので、森に入って、炭焼きや、木の伐り方、山菜採りを教えてもらうというのですが、そのフィールドが今ないんですね。この空白の期間が長ければ長いほど、本来の文化が途絶えてしまうというおそれがあります。そうしたこともあり、森林文化のごく一部ですが、体験を通じて子どもたちに伝えていこうという事業を県から委託されて、昨年度は会津の文化を体験する事業、今年度は中通り地方の食文化を継承する事業をやりました。

かたちとか人材も含めて、いまの子どもたちが成長したとき、福島の復興ができるように準備していこうと考えています。ただ、福島の人にはシャイなんです。それがまたいいところなんですけど。待っている人が多いものですから、できたら、県外から森に関わる人に福島に乗りこんでいただいて、実状を見ていただき、外から福島のいいところを評価していただけたら、なにか行動を起こしていただけたら、福島の人にも後押ししてもらえるので、福島が生き残れることにもなるのではないかと思います。

お願いがあります、ぜひ福島に来てください。

おいしいものがいっぱいあります。いい人もいっぱいいます。とくに若い女性が来ると男性も元気が出てくる（笑）ので、ぜひ女子会の方々に来ていただきたい。

今できることはなにかと考えると、魅力的な若い人にたくさん福島に来ていただいて、福島の若い人たちを元気づけてもらうことが、遠回りかもしれませんが、そこからだと思っています。